審 査 結 果 の 要 旨

（１）研究の目的に意義や独創性があるか。

本論文の目的は、菅原為長撰とされる、鎌倉時代成立の『消息詞』を研究対象とし、①所収語の使用場面・意味用法、②内部の組織・分類、を分析することにより、『消息詞』の所収語彙の性格と内部構造を闡明することである。従来、『消息詞』は、往来物の一種であるという説と、古辞書の一種であるという説と、二説が存在したが、上記の事項を明らかにすることは、「『消息詞』は往来物か古辞書か」という重要な問題の解明にも繋がる。また『消息詞』のような書物は、中世の教育を支えた基本文献であり、その性格と内容を明らかにすることは、日本の教育史においても重要な意味がある。これは、『消息詞』の研究を通じて、中世の教育的文献、要するに教材が、どのような体系を持ち、どのような意図で編まれているかを明らかにすることでもあり、独創的な発想の研究であると言える。

（２）研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

『消息詞』のような、中世の古辞書に類する文献の研究方法は、学界において確立しているとは言い難いが、収録される漢語の詳細な分析が基礎になることは言うまでもない。その語義の分析は、同時代の古文書の用例を、その社会的、政治的背景を含めて精確に理解することによるしかないのだが、従来そのような地道な作業を行う研究者は少ない。本論文で用いられたこのような分析方法は、既成の辞書類が行っている語義分析を遙かに超えた水準となっている。

また、『消息詞』の体系性を発見し、分析しているのも、本論文の優れた点であるが、やはり方法としては、古文書での使用状況を基礎に考察している。これも妥当な方法であり、しかもその作業の学問的水準は高いものと認められる。

（３）研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

本論文で扱う『消息詞』の語彙は、中世に使用されていた漢語であり、その語義を決定するためには、既成の辞書の類に頼ることはできず、同時代の古文書などを精査するという、極めて労力の多い方法を取らなければならない。本論文はそのような真摯な作業の成果であり、難解な古文書の内容理解も適切で、文献学的能力の高さを示している。したがって、研究資料やデータの収集と分析は、本論文のいわば中核をなすものであるが、実に適切になされていると判断される。

（４）研究の考察と結論が妥当であり，学術的な水準に達しているか

本論文は、『消息詞』につき、①所収語の使用場面・意味用法、②内部の組織・分類、を分析することにより、『消息詞』の所収語彙の性格と内部構造を解明した。分析・検討の結果、『消息詞』は、政治経済的な内容を持つ公的文書用語を、テーマ別に大分類した上で、使用場面に応

じて下位分類するという、極めて体系的な構造を有していることを、明らかにした。この点から、本書が、社会経済的語彙を学習するために編纂された、有用な教科書的辞書であったということを再確認した。

これに加えて、本書が、辞書の発展史の中で、重要な位置を占めることも明らかにした。室町時代に入ると、『色葉字』という一類の辞書が作成され、社会経済的内容の文書用語を収録するが、『消息詞』所収語彙を「いろは」順に分類し直せば『色葉字』となる。ここから、『消息詞』を『色葉字』の先蹤と見なす可能性を指摘した。

このような考察と結論は、精緻な文献学的論証に支えられているため、説得力を持ち、文献研究として高い水準に達している。

（５）取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本論文は、『消息詞』の内容と編纂の特徴を分析することにより、それが日本の辞書の発展史において重要な意味を持つことと、鎌倉時代の武家の教養として身につけるべき、司法・行政の場で現実に使用される社会経済的語彙を、特に学習する目的で作られた、一種の教科書的な辞書であることを実証した。これは文献学的手法を用いて、特定の文献を精確に分析したと言うにとどまらず、その成果は、日本中世の歴史、教育史に新たな知見を加えたことになり、学問的意義は大きい。

したがって、本研究は連合学校教育学研究科の博士論文として十分な水準にあり、同時に、人文科学研究として広い内容をもつことから、博士（学術）の学位を与えるにふさわしいものと認められる。